

優秀賞論文要旨

ヒッチコック映画で見る時代変遷

— オリジナル版とリメイク版の比較 —

橋 本 英 子

本研究は、オリジナル版『サイコ』(アルフレッド・ヒッチコック監督, 1960)とそのリメイク版『サイコ』(ガス・ヴァン・サント監督, 1998)、及びオリジナル版『ダイヤルMを廻せ!』(アルフレッド・ヒッチコック監督, 1954)とそのリメイク版『ダイヤルM』(アンドリュー・デイヴィス監督, 1998)を比較し、そこに認められる違いを社会背景と関連付けて考察することによって、それぞれの映画に表象された時代変遷の特徴を検討することを目的としている。その際、登場人物の性格特性、言動、社会的地位、服装、作品の主張、BGM、映像の雰囲気など、考察に役立つと思われるもの全てを分析の対象とした。

オリジナル版は1950年代、リメイク版は1990年代に制作されているが、その間に一番変化したものは女性像であった。リメイク版の女性は全て職を持ち、より行動的・攻撃的に描かれ、従来の女性のステレオタイプと一致しない点が多くなっていた。外見上の特徴でも、オリジナル版の女性は服装や髪型が画一的なのに対し、リメイク版ではパンツ姿や、さまざまな髪型の女性が登場する。また、リメイク版の女性は結婚に対する意識が薄く、恋愛をゲームのように楽しんでいた。これらは1960年代以降の第二次フェミニズムの影響を反映していると言えるだろう。女性解放運動によって多くの女性が社会へと進出し、社会的にも経済的にも自立していった。また、その後の女性の就労率と離婚率の増加から、女性の恋愛観や結婚観も変化していることが読み取れる。これらの変化は映画に表象され、リメイク版の女性たちは、社会へ積極的に進出し、ある

面では男性よりも知的で、また男性と同様に暴力性を持ち、男性と対等な存在として描かれていた。それは女性＝被害者という観念を壊し、良い意味でも悪い意味でも、女性の新しい姿を捉えている。

またリメイク版では、暴力場面や性描写の増加など、映像そのものが過激になっていた。1960年代からの若者文化の台頭と、1970年代の映画の規制システムの緩和化により、映画はより過激なものを描くようになった。リメイク版では、オリジナル版にはなかったベッドシーンや、悪態や血を多用した格闘シーンが挿入されている。ここから、1990年代では過激な描写がタブー視されなくなり、また時代が進むにつれて観客がより刺激的な作品を求めていることが読み取れるが、同時に、現代の人間が暴力的なものに対して鈍感で、それを安易に受け入れてしまう傾向も示唆している。

また、対象作品はサスペンス映画であるが、リメイク版の方が雰囲気は暗く重い印象を受けた。これは、1940年代にブームとなった「フィルム・ノワール」と呼ばれる、虚無的・悲観的・退廃的な指向性を持つ犯罪映画と似ている。このような陰鬱な作風が続出したのは、世界大戦の終結や冷戦の勃発といった当時の不安定な世相が反映されたからだと考えられている。1990年代は『羊達の沈黙』(1991)を代表とする多くの犯罪映画が制作され、新たなブームとなった。1990年代はインターネットが爆発的に普及し、人間関係が薄れて孤独感や不信感が高まり、精神的ストレスや、それによって引き起こされる犯罪がメディアで多く取り上げられたが、これらが1940年代の社会不安と似ており、1990年代にフィルム・ノワールブームが再来したと考えられるのではないか。

本研究では以上のような考察ができた。20世紀最大の娯楽メディアである映画は、見世物的な娯楽として登場したが、技術の成熟に伴って深みを増し、社会を反映する媒体として、時代を探る有効な手段になり得たと言えるだろう。